1 13
939
~~5~~20

門イ12
号 939
巻 6

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

東都　曲亭主人　編輯

中輯第三十九

雲中なる鐵撮棒
腰間る栗柄刀

却説修羅五郎經任ハ廣庭ゐ聚合一ゐる。身近死驍卒二百名を前ゐ立一後ゐ後ゐ二三の城門を推開しく驀直ゐ馳出ゑ寄ゆの士卒あれを尺く。驚破經任が出てるぞ捕ゐ逃しそと相喚ゐ。群立蒐く擊ゐ。賊徒ゐ左右隊ゐ受左隊ゐ拉く些も怯ぎ只一方をうち破ゆく走脫ゐと進ゑけゐとさゑびこの真夜中ゐ賊徒ハ内外の戰ひゐ鬼六五十五六ゐハさゐうゐ或ハ擊ゑ或ハ逃亡せゐ。ゆゐハなくゐゐ。ゑ經任ゐ從ゐ衆賊かくのゑ死暴隊あり。寄ゆハ捷ゐ乘るゐ。亦是ゑ死の敗軍ゐ士

卒の戰殺少うゝねど今光仲ゐ後あく柵中ゐ入り一兵三百騎ゐハ足ざりけ。
かゝべ是敵躬方その軍勢ゑ甲乙ちゝまど寄ゐハ數度の苦戰ゐ疲労て
人馬の進退如意ゐゝど今又賊の暴隊を逆さく心だりハ早まどゝ短く
急ゑ突立ゝまく左右へ披ゝ靡くゐゝん賊徒ハ沼ゝまゝおもく進ゝく推
破ん競蒐れゞ寄ゐもおくを破らまゝと踏留ゝまく戰へども一進一退勢ハ
異ん力同ゝかゝざまゝべ佐味下河邊が勇あゝゝ弁ひゝゝてぞゝえゝけ。
浩処ゐ曩ゑ義秀の謀ゐ後ゝく林の中ゐ引籠ゝ鯨波を揚ゝゝ四十
個の因兵ハ奇兵の計累その圖ゐ入り寄ゐめ軍兵二
の城戸ゐ乱れ入ぬと云ゝくゝまゝべ亦俺們も聊分捕功名ゝゝく前度の
恥を雪んとゝく貪樹下を出ゝく云れゞ賊兵ホが脱捨ゝゝ兵具あり器械あり。
ゝゝ物沼とりとゐく取ゝく特ゝと身を固め目今寄ゐ敵駆ゝゝまゝく。

頻ゐ進む賊軍の右隊の方より不意ゐ起ゝく咄と嘩ゝく駆ゝく蒐れゞ賊徒ハ
おまゝゝ騒慌ゝく驚破朝夷が出ゝゝゝゝ殺ゝゝそゝと罵りて忽ゐ乱と
騒ぐ敵ゐ足を立させそと光仲頻ゐ士卒を奬ゝ息をも吻せず攻ゝり
けれゞ衆賊いゝく辟易ゝく三の城戸ゐ引籠ゝ再び防げと散動ゝく程ゐ暁
ゝこの風烈ゝく兵火四方ゐ散乱ゝ高樓大厦一宇も遺ゝゝ煽ゝゝく
燃揚まゝゝ三の城門ゐも餘炎相ゝく猛火ハ賊徒の後を断ぬかゝゝ進
退度を喪ゝく進んとゝのハ寄ゐの矢石ゐ命を隕ゝ退んとゝゝゐハ
煙ゐ噎ゝく仆伏ゝ死骸ハ地上ゐ横ゝく河原の蛇籠ゐ似ゝれども尚
水ゐ沈ゝ撼めり況又後堂ゐ迷ゝく煙ゐ包ゝ敵ゐ焼ゝ婢児們の
泣叫ぶその声遥ゐ伝ゝゝ。衆悪克黨數を盡ゝく地獄の呵責ゐ阿
鼻焦熱の苦艱もかくゝそ有けめと想像ゝまゝく駆ゝゝ程ゐ経任ハ

憑切る三百個の隊兵大を撃まふければ唯彼鵐夜叉鵐夜叉ホ芳
らぬ克賊十餘人を。騎馬の左右ヨ立ち。六尺餘の鐵撮棒を風車
の如ち振く。近つく敵を打折けば。兜も脳も共ホ摧けく。死ざるなん
あうけ。只その驍勇のこなるを。渠ば進止るもとり。凡一丈ばかりの間ヨ
黒雲深く立掩ふく。或ハ隱し。或ハ顕し。電光閃々走りく。人の眼を射く
けるば狙撃んとするのこを。近つく。ホ術。射て落さんとるの弓も
弯ホ的を沒ど。只その棒を喫ドとく。用心をなるのこのまば。鵐夜叉ホ
つまるヨ氣沒く。敵退けば。これ進を。競ひかまば。雲ホ隱まく。漸くホ後関の
こ。ろ。ろ。出んと立逃まば。高利高吉頻ホ焦燥く。ひとく士卒を罵奬し。前を
遮ま後を衝く。撃んとまば。雲霧の外ヨハ物もなく知くみる。忙然る
頂の上より。閃く。経任ば。鐵撮棒ホ高利ヨ馬の平首打碎ま。餘れる棒ホ。

一個の軍兵。右の隅打放さまく。脆ハ向へ礫と。死軀ハ其処ヨ平張く。馬共
倡ホ倒まけり。高利吐嗟と下立く。ろ。ろ。ども引退けハ高吉も吉を掉く又
俳こ。く追撃ま。佐味下河邊ば悍死ま。當ばく。ば。ば。士卒ハいよ
いよ氣後ま。く。其処ヨ彼処と。罵騰ば。嵐の庭の群雀。先ば避て鵐夜叉ホ
引ま。ま。知ざ。ま。光仲遥ホ。ま。ば。ば。経任を走。ば。蠱毒を
遺ま。ま。ば。軍功の全ば。命を隕。痍を負ま。士卒の苦戦も
空事ま。ん天神地祇。近江ホヨヌ賀明神當國ホハ膽澤の神社
鎌倉八幡大神宮神明擁護の奇特ま。逆賊退治ま。
心中ホ祈念ば。馬を間近く乗居て雷上動の弓ま。直。兵羽の征箭を
刺く。満月の如弯固めて。敵ハ何処と定めま。雲の真中へ彈帯と
切て飛ば。張音と共ホ応く。雲ハ煙の滅ま。如く。敵の人馬ハ顕ま。

とりんまゝば只彼鵺夜又ハ吭を項へ射徹さゝ鏃あまつさへ経任が乗さる馬の胸板へ骨を摧かく縫まゝば人馬共倒仰反く鮮血ハ塗れく倒まゝ目ゝまゝ敵ハあらねども昔もかくや頼政の弓箭の迭徳掲焉怪鳥ハ象る鵺夜又ハ雲の絶間ハ射らまゝる亦是脱まぬ名詮自性躬方も敵も阿とだるまゝ齊一驚嘆せざるなし。経任既ハ馬を射させくそが俊直軀と下立程ハ光仲ハ敵を認めく透もあらせずうち頬ハ二の箭ハ則云声の水羽ハ矢声を被く礫と射る経任も亦眼なく頭を傾け方を縮く避んとまるハ暇なゝべ左の臂ハ深くとうち戯まゝると肘推曲く右手ハ弦引く引抜つ流く鮮血を物ともせずその箭を股矢と投返せば射る人もなゝ不思議のハ煉剽疾うく光仲の面をさゝく内ハ来るる弦。弓ハく丁とうち落まゝ迭ハ得る武藝の奥妙甲てなるハ似まゝども。

経任竟ハ幻術破まゝく剩矢傷を負ゝ高利高吉二騎相並て鋒薙刀を晃ゝ。追ハせずと馳ハ来る。前後ハ後ハ諸軍兵遠ハ矢を横矢を射ゝ。近ハ刃をうち振く競ひ蒐まゝば光仲も只管旌を進めけりさまゝば又賊兵ハ脱まゝくとゝひゝ三及あまつさへ退まゝく。路次ハ陜ハ築垣の辺ハ齊一躇駐り且く防戦ハ経任ハ鵺夜又を先ハ立く金撮棒を瓦落めゝ突立ゝ後関のかゝる先とゆく程ハ高利高吉信と凡く追懸駆ゝと焦燥ども石をりく築籠る萬年垣の間ハ賊徒ハ防ぐ留まゝ小敵なまゝども速ハ殺崩をべくもあらず祇べまゝるく賊首経任をうち漏を欲と敦圍ハ士卒も俱ハ奮戟く推破ゝんと足を跪前後を其処ハ争ひく。痍を負ハめゝんヨメかゝけるさる程ゝ朝夷三郎義秀ハ曩ハ二の城門の邉く賊徒を駆打殺ゝ寄ゝの

軍兵柵中ふ。そやうち入りぬ。と云くけるに嗣忠が逃るを追ふく頻ふ進む。
呼留め和主ハ何と云ふ。そんと。是とこの柵を火攻せ。ハ名を取ん。との
為なるぞ。只交遊の義ふ仗く。吉見冠者を救んとそ。ありされば冠者を
救ひ出し。賊徒をヨヲく殺し。是ハ遺る。経任のそ。ちん寄ふハ四方ありさき
援を獲ん。やう。ふく。柵ふ入るめ。紙。又彼ふ先。ちく。経任をも殺とハ
人の功を奪ふ似さり。勇士ハさ。ふ業をせど。三の城門ハ寄ふ攘りく。
彼等ふ経任を殺ひ。べ。ゝや。経任ふ相従ん。残黨ハ。ふ。あ。た。猛火と
人ふ。と。籠ら。し。天誅ふ。で。追る。ゝ。且く休め。彼ゝ。ゆく。遠見せん。と
先。ゝ立く。後関の。ふ。さ。ふ。堤防の。ゝ。生ふ。ち。登く。三の城門の戦ひを
快げふ。ち。ん。く。ふ。く。賊徒ハ寄ふ。ふ。殺ひ。く。大半滅亡せ。ど。今
人切れふ退ん。拉く。経任遂ふ。後関。り。脱ん。る。炎。勢ひ。ま。ハ。嗣忠ハ。衝と

立あ。く。鋒ふ。携。く。ふ。ん。定。く。ち。驚ん。朝夷。め。彼。ん。殺
遺。ま。る。賊兵ハ十四五人。ふ。過。ざ。く。ま。で。垣。垣。の。間。ふ。防げ。寄。ハ。進
む。を。ま。く。経任。脱。ま。ん。と。今。これ。も。殺。留。め。ど。ハ。後。悔。其。れ。ふ
立。ま。ん。誘。ま。と。の。ひ。け。く。驀。直。ふ。走。り。下。で。鋒。を。拾。く。経任。を。逃。殺。ん。と。進。む
ふ。そ。義。秀。ハ。こ。の。光。景。を。見。れ。た。驟。く。氣。色。あ。く。噫。面。倒。な。る。奴。原。る。ふ。人。を。人。と
ゝ。ぐ。そ。ま。れ。ハ。攘。ま。く。ま。て。を。る。ふ。愁。ま。る。く。茄。久。く。彼。た。り。の。敵。殺。と。ま。ま。ま。
嗣忠。の。で。ハ。ふ。の。る。亦唯。ま。ぐ。る。紙。下。さ。る。弱。虫。共。と。ま。ま。く。ま。を。ま。く。塵。ち。
拂。ひ。ま。て。ぞ。隄防。ま。ま。を。ま。立。る。ま。當。下。馬。類。嗣忠。ま。ま。経任。ふ。向。ハ。近。ま。ま。妖賊。経任。
ま。ま。ま。知。ま。ま。吉見冠者。譜。ふ。の。家。臣。馬。類。標。吉。郎。嗣忠。ま。ま。朝夷。殿。の。
隊。ふ。隷。く。真夜中。ま。の。働。ま。ハ。聞。も。ま。つ。く。ん。ま。ん。ま。ま。ま。天羅宴。ふ。密。ま。
く。刃。ハ。汝。ま。頭。ふ。臨。め。ま。観念せ。ま。と。罵責。く。短鋒を。抗。く。刺。ん。と。ま。ま。経任

うつらんく大元ハ怒り彼追拂へと敦圍喇る声をもやくべ鶏夜又も大刀を真額ゑ拔翳しく走り蒐れば嗣忠ハ妨まもと丁と突く鋒を度矢と受留めく下を拂へば跳場ゑ又突出せば身を反ゑ少選ハ挑こゝが鶏夜又ハ金ゑ大刀を戛丁と巻落さまく怯む武透さまど鐫を嗣忠が鋒ゑ乳の下串まく鐫ハ著る木兎の頻鳴如く目を剥く仰乳ハ反て死ぐけゑとの間ハ寄くの士卒ハ彼十餘人の賊兵を遺るく砍伏せく高吉高利真先ハ経任を追蒐ゑつ佐味高利ゑハあり下河邊高吉ゑハあり。と名告懸ここて嗣忠共伯二方ゑ推取龍く強んとぼべ経任ハまく怒く鐵撮棒を打振こ右ハ當ゑ左を拂ハく些も撓ど戦ハ光景漢末の呂布単騎ゑく劉関張ハ敵ゑる如く亦是毒蛇の谷を繞ゑく二虎を啖んとるの勢ひあゑ。嗣忠高吉高利ハ怯しくハあねども。その梟雄怪力ハ當るべくもあらざまべ短鋒も大刀も打折くいとと危くゑ。ゑ光仲更ハ士卒を進めく八方ゑ箭を射て捕んとつまど。経任ハ撓ど強く雨ゑ繁く飛る征箭を彼棒ゑく打落ハ適その身ゑ立もあまど實ゑ鎧を著る故ハ竟ハ亦裏を被ず寄て。ハゆ左く圍を右ハ撃んとぼべ遠然ゑく左ハ。それを前ハ撃んとぼべ俄然ゑく後ゑあり。その棒ハ中ゑるべ肉破れ骨碎けく仆まどるあんゑけるされば寄ゑハ士卒ヨ勢ゑれた一個の敵ハ撃立られく。ゑ度ひゑ元靡死ゑ。度と崩まく築垣の邊ゑく引退けば経任こま元追捨く走り去ゑく前面ハ直軀と立ゑる素肌武者是則義秀ゑり大路狹ゑと立塞ぐゑる勇敢無雙の勢ひハ経任ゑ。ゑ元ど驚ゑく。そぶ俟其外ハ留ゑ遠を窺ハ撲んく鐵撮棒を登ゑ

直せば義秀佶と疾視て妖賊逃とも路はあり義秀既ふたゝびあり汝を
俟と云ふ言葉やいなやあくまで冷笑ひ原来汝が朝夷なる狗目ふ物見せん
と身をひらりく掛声悍く打棒を閃りと外せば踏込て微塵ふなれと
又打かゝる棒の真中丁と合ふるとなく経任なる遠く引放すと由一声
ぱっく引どもく無二も動くどこへ朽をもと一身の力を左右の巻ふ入まく
息を限りふ引合う寄るの士卒へこれを見て醉うが如く醒うが如く箭
を射ずに遠巻くうち守りてゐ居うける義秀へ右の隨ふ経任を
疲労へ透を見合へ也と声かけく左違へ礙と引捨まば経任も棒ふ
共ふ七尺あまり怪物ぐ輾んとく踏弟りこんまば棒へ弱ふ成るなく
遠あるさふ捨らまとうあるこを念やと焦燥へ大刀抜翳へく後方より
砍んと進む刃の光ふ義秀も知へく見久りく果りと引抜く倶利迦羅丸

降魔の利劍へ勇士の刀尖丁と礙と砍結ぶ鋭紀大刀風へ四下を拂く挑
戦ふ程こそあまと義秀畫へ内を刃と共ふ経任が首へ地上ふ礙と落軀へ
高く筋斗くうて足を揚る鰕腰突へく投らく如輾びう寄ふへ光仲
高利高吉士卒戎へ弓弦を鳴へ胡服を敲へく感ぜう声霎時へ鳴も
止ざりけるこれ義秀へ絶く誇れる紅色へく刀を腰ふ拭へ納めく
遥ふ寄へ来さ招紀各位迭ふ散動を禁めく静ふ成るを待けく
経任が首級へ汝達が月来欲せ一ふ成るを見ぬ
れへ只友の為國家の為又民の為ふ已こを為ぬ此奴を殺ぬ必へも
寄へ来接けく名を取へ賞を徴るあるまじさ彼鐵槌棒へ用る
へあれば分捕とるそと喚へく件の棒を搔取へいとも軽げふ引提へく
後関へ走るゆゑ光仲頻ふ慚愧へく下河邊高吉へく義秀を

義秀一喝
くる經任
を斬る
朝比奈
畠山高刺
光仲
つく夜叉首級
馬蹄の塵
つく夜叉首級

追せ〻ふ何如ひたすら及ごとく徒ふ還て来ぬまでいつく心安らゞ躰く
嗣忠を召近つけくその素性を問ふその武勇を誉その火攻の計畧を
訊ふ嗣忠ハ義秀が簒姫を救ひうゝ〻ゝ夏の趣更ふ義邦を技切く
賊徒を撃靡けゝ為体廣光ふがるのまで。遺ゝ志を告ゝ〻ば光
仲竹く且歎び且感嘆〻く已まぢ又義邦を迎ん〻く下河邊高吉と
馬艱嗣忠を遣〻けるこの時天ハたゞ向明ゝ程ふ経任が年来土民を
虐く奢る隨ふ美を盡せ〻大厦高樓ハ焼落く二三の城門の間る守
屋西三軒と兵粮倉のみ残ゝ〻ば光仲件の守屋ゝ入く経任が首級を
実検〻更ふ雑兵ふ代部〻くその一隊ゝハ餘燄を滅さ世又一隊ゝハ
兵粮倉を閉〻く士卒の為ふ飯を炊せ騎馬ふ勝ゝる使を擢く鎮守
府ゝ遣〻。経任誅伏の趣を廣綱ふ報知せけり。かゝる折ゝ城戸四郎武

詮水草太郎五昌之ハ六十餘個の雑兵ふ生拘の賊徒を率〻来ゝ神
井鬼六が首級と共ふ大将の実検ふ入〻く各苦戦の為体及武詮ふ
従ゝる十個の勇卒が戦殺の顛末を詳ふ告ゝるふゝん光仲竹く潸然く
涙含まゝ〻感嘆〻現今曉の戦ひふ鋭を突堅を辟ゝた命を鴻毛ゝう軽せ〻。
ゝが隊兵ハヨヌけまゝども誰ゝ又ゝこの両勇士の右ふ出ゝるあらんや城戸ゝを不
思議ふ萬死を出く為ひゝをかく幾百騎の敵を内ゝ殺崩〻剰
賊将吠又が馬の脚を薙倒〻く。佐味氏ふその首級を取ゝ〻ハ勇ゝ謙
ゝ〻ハこゝのゝ〻ゝ更ふ水草太郎五を援く剛敵鬼六を射て落せ〻ハ
趙子雲が風ゝ〻ゝ水草ハその勢六十餘名さ為寡兵をかく賊軍
の四百餘騎を蒐散〻賊将猛虎が首級を獲く四郎共倡復讐の宿志を
遂〻ハ勇ゝ〻ゝ馬孟起が風ゝ〻ゝ城戸四郎ふ従ゝく柵

中ニ紛れ入り其外ニ命を隕したる彼十個の壯夫とそ惜むに餘りあるあれ親あるあ子あるあの妻あるあいとれを扶持して飢寒の患ひあるべきあめんくるしくも有ざる死武功あるとそ賞せるべき武詮曰ク之頭を擡某ニ幸ひに父兄の怨を復せしめ母嫂の讐歇賊將蘇塗暴道いいぬる日横死せしと伝へけば遺憾しくいと笏ひとそとしく嘆息とその孝その義ニ雑兵ども感佩せざるいあるこけり却説高吉同忠ハ黎明の比及ニ後関の陣とりふく義知廣光ニ逢て嗣忠ハ進て迎て云云と告るよあん高吉ハ恭しく性名を告来意を述て先ニ立後ニ後引て守屋ニ来り光仲遥ニこと成れくて慌忙さ出迎て冠者尊體恙なきや二人も一別以来あり且ちるとと義取りて上座ニ請ととも義邦ハ尚ちろ解ねばうちれとるのとあのハも廣光ハ脉うとく簀子のほとりニ膝を進めて光仲ニうち對い昔ハ媼子今ハ

ヨ賀逆賊退治の大將ニかうヤさんハ嗚呼ちるべけまどの忘れ難ども信和君ゞ目ゆ冠者を冠者とヨんとるる欲現軍功ハ高かるべ。ちるまども義ハ鬼とり玄歳の暮春の厄難ニ勝澤の涙とりゆくとりを冠者ニ後れとと加賀へ沒ゆるべいとく武藏の大田ニ世を避る廣瀬ゆ値偶さんや友を捨て栄利を計る式信とのれ欲義とせん欲かまべけやとり友達の舊交をとくとべるまどゆ主君ハ義ニ背くく栄利を計るオとられば危難を信夫の館ニ避て更ニ逆賊の毒ゆ陷さまと夫婦寄を受とまでと義を守るをとく祐る神あり朝夷生よ救れて遂ニ時言式設とと記ぬ會誓の恥を雪るニ足ゞ死欲ゞ若しくまゞ実検しく無會殿へ披露あとそれをしと推辞ゆ欲のふそやと怨ざまゞ光仲怒ゆる氣色もちくつくと笑のく嘆息し縁故を詳ニせねば恨らましゆ理りとう士卒側ニ

あるとかいふとも只ゴ非を飾るれあらぬ。さぶれこぶ口親怨を解ぶ
便佞利口小任さるあとろまん已上紙得ざるーこぶう人をハ十河辺
小三郎高吉ヲよく知さまれ小代アるく説おとのくハ高吉道ニ
廣光小ろ数ひ三二の怨言ようあれ。ヨヌ賀殿ハ〇ぞう友を捨く栄利ハ
走る不義あらんや。さぶ某隊くこの見聞ー隨ハ告べ紀ヨヌ賀殿ハ
勝軍こそく時夏ハ防留めーとれ戦ひ難義ハ及ぶーうども驟雨ハよりく
必死を脱さ冠者を遠く延さん為ハ東のうえ走ヲ死。かくく又時夏ハ
烏鵲川ぶぐ追逼アるく再び難義ハ及びーとを義秀の養母巴の尼ハ藍
玉院の名代ハ信濃の善光寺へ参りーかるさ圖らどさまハ救まるく東ハ毒
蛇の腮を脱さ烏鵲川を渉せどる心東ハあらざまぶ巴の尼ニ別をヲ上ぶで
冠者ハ追著んと思ふ為ら寺法あまぶ放遣ることを許されぞさまぶどるく再生の

恩あまぶ辺去んハさぶゴゆく。さくろるぶども武蔵ある太田の藍玉院へ伴れ
菖蒲尼公と廣綱朝臣の見参ハ入りあのーさそこまるぐハ高吉ハ信
聞ろ越ありかくヨヌ賀殿へ次の日尼公ハ暇を請ふく加賀の小松ハ
赴ろ。数日冠者を索ーかども佐味ハ内ぬ彼地ハ在らねば。その消息を
知るハようーあ折ら追捕の厳命下アるく巷ニハ高牌を掛ーぶぶ
さらありその人々の所在を穿鑿せられ。身の措所なきまハ再び武蔵へ
脱れ来く菖蒲尼公ハ扶持せられハ玄歳の夏のるあれさそこの條ハ
眼前ハ高吉ぶ見ろ所さそその後ハ箇様々如此々この義ハるるく麁洞
朝臣ヨ愛顧せらまく且見姫を妻せるま絶ろ藏人仲家ぬの名字を言を
るるハうまぬ。ろあれどもヨヌ賀殿ハ舊交を迷忘せど冠者主従朝夷ぬ
の往方をろハ懐あまるく苟且の言の葉ハもの出るぬ日ハるるア死かろ

故ふ此度經任誅伐の台命を稟まひる。その情愿ふあらねども逆賊を討滅しく冠者を救ひ出すべ。公私両ぐら面目あらんといふとも人の性あ差別あり心の変るあまとども豈きのめ賢ふく。けふ佞奸とるあ

あらんや願ふ主従疑心氏散しく朋友の義を全ーあ。ちくらべ自他の幸あふん

と縡詳ふ説諭せ先仲ハ父元ふるあ釋く額ふかえ三二ハ疑ひ。ごく解

ざや冠者ハ何と出あ。倘高吉ぐ言信ぐくハ駿河前司ふ向あさぐれ家

臣と外男の言葉ハ證ふるぐと思ひあぐ巴の尼ふ再會の日を俟よる

外ざあ。ようや初の井平うんぐ。疑ひも受まぐ紀ふ恕ふ擇取られ武士の

数ふも入ぐ。ろ名利のふろふ志の仇ふ多ぐと嗟嘆しく安ぐ元

久ふ六。廣光ハ後悔の頭を霎時擡げど義邦も亦慚愧しく席を降りく

貌を改め某主従愚癡ふく疑ふやれるを疑ひ良友を誣んとせる。

首ぶ面目ふ。曩ふ下野を去ぐ元仇を防ぐく危窟を救れ今又

和君の武功ふるく國家の寇身の讐る妖賊経任滅亡。曩時夏を發

聊恥を雪めり。莫大の恩義ふ。縱疑しるあるも恨むぐ元

ふをあらぬ殊更過言ふ及ぶハ廣光が疎忽ふ。渠ふ代りく勸解

侍ぐ。礼を許さぐ。賠話らまく廣光ハ額の汗を推拭ひ某ふ

浅しく所ふ憚らず。外ざを首ざ。失敬過言駟も亦及ぐ。その

罪萬死ふ當ぐ。御家臣の明辨ふく疑念ハ氷のごく解る。軍法ふ行ハ

るくとも一毫も恨ふ。謬てそれと席を避く陳ぐ。光仲喜悅の冒を

ちらく又吉見主従を舊の席ふ著く。更ふ嗣忠武詮昌之ふを召近つ

冠者ハ心意ふ。當坐ふ疑心を釋しハ。元ぐ欲ぐ元志を知つめるふ辞を添ふ。

四郎と太郎五ハ日ごろ友を

武詮昌之ホハあろ氏ゆく小勝を進め。まず義邦ホ拜謁ーく。恙なく欣びを述さく光仲の志。舊文今ホ等閑ろく。只速ホ義邦を救ろんとろいまー。事の急氏告ろホで光仲も亦武詮昌之ホグ鎮守府の城を攻ろーろ。神井鬼六を撃ーまぐ。その武勇忠孝の他ヨ捷きーを説示せバ義邦いよ後悔ーく。廣光嗣忠ホを凡ゆくろ。汝達もいまぐ識らー。児四郎と太郎五ハろぶいまぐ莊司許寓居せぐろー已前より。正法寺の枝城ヨ在りと信ぜろのとろまバ對面ホうーるかりん。その親ホーく。この子共あヨ。顧ベこの春江ニニハ鎌倉へ赴くとろく馬粮標吉ハ越路へ出ぐ。四郎太郎五共侶ヨ。皆圓山の館ホあバ信夫の翁も戦殁せ。篋姫も賊徒ホ取ぐまー悔て及ばぬろホ。あまど又今ぐろホ送恨ホ。そ。といホ廣光嗣忠ホも愀然ろく。眥を潤ー。又只武詮昌之ホ。ろホ拔萃ろ忠勇孝義を羨誉て已ざりけり。當坐の問答果ーバ佐味竺内高利ハ幕の蔭ろ進ミ出く言見主後ホ對面ー。さくいホ。某冠者と舊交あまバハ美里の厄を救んろホ將軍家に請まぐー軍監をさ人兼ぐく追討使の後ホ從ハ既ホ素懐を遂ーろ欣びこれまあるー。さても冠者ハ時夏ホいく誣らまのー。此某許ろ當ホ脱ま去まのーと欲このろハ鎌倉ホく出陣の前日ホ藏人ぬホ。ろ元さぐれ某官途ホ進ぐく小松の郷ヨ在ーまどろを豫く告べくろびあぐろ日夜官務ホ暇なく人ーを若ーめろ。そこそまぐの夢ホく冠者ハ厄難面を真さ今青雲の時到まろ相伴ホく鎌倉へ帰參の日ホ程あらぐ。いまく自愛をヨ人ーと慰めく且敬まれバ義邦頻ホ謙退ーく敢儲の席ホをろぐ某菲薄駑才ホく。猶且恥あるめろホ諸賢の愛顧を蒙ーと。かくのごぐ況ハ望ホ過ろ。和殿ハ在鎌倉ろーく代夢ホぐも知ぐーく。去ー歳ハ朝夷生弐紹介

ゐることあり。元歳ハ某朝夷廣光。みゐ小松へとく走りて。主従朋友ちりくゐ。
ちりぬ。比の千辛萬苦も今又全聚ぶいつゝ如く。夢の如し。憂ちなれば。歎
びもの。苦後の楽とて真楽ちゐめ。好意謝ちゐ餘ありいと欲しくゐと。
回答をもとゝ。高利ハ坐ゐ羞く。頭を拊そハ宜ゐ胸ゝ。和君と三二のゝ
ちゝ藏へぬ。朝夷ゐ。いづゝゐ向ゝも懈をのひとくゐ辞ハあゝど面目
なし。と勸解ごちく。元来話る舊友の笑坪の會ゐ廣光も佐味ゐ今亦隔
ゐ。志を嘆賞ゝ。そて嗣忠共倡ゐ武詮昌之ゐと向後を契ゝ。迭代ゐ
忠勇孝義を誓誓ゝ。辞のゝぐ四下ゐ近ゐ士卒ちく耳側てゝ。
聽つ得ゝゐ。ゐ時ちるかも友ちるかもと讃美せり。

中輯第四十

靈佛の菜摘籠
豪傑の葛藤索

却説義邦ハ廣光ゐ齎ゝ。ゐる刀野太郎時夏ゐ首級ゐ分捕の大刀を添て。
実撿を請せゝぶ。光仲ごとを受納めくその武功を稱賛ゝ。感悦ちるゐ。
ゐゝ假ゐ寛治の佳例ゐ任ゝく。剛臆の坐を定めゝ。士卒の軍功を評ちく。
凡此度の軍功ハ平泉の柵を火攻ゝく。賊主経任を討ゝ。朝夷生第一番
ちゐゝ。その次ハ反賊時夏を殺ゝ。前衍賊ゝ。吉見殿ちゐゝ。彼ハ
和田の陰児ゝ。ゐハ貴ゐの公族ゝ士卒と共ゐ。ちゐゝ。第三番ハ城戸四郎第
五番ハ水草太郎五ゐ。武功ゐ高ゝ。第六番ハ海老尾加世九（厨川の兵粮倉を焼く。又ゝく苦肉の
計を行ひ。ゐたり。）第七番ハ江三二及馬艱標吉郎。第八番ハ下河邊小三郎。第九番ハ
軍監佐味生第十番ハ間中隼人。この他の士卒。ちゐ。ヨヌかりゝハ只假ゐ評ちゐ。
いつでゝ愚意ゝ任ちゐ。柳営頼家卿ゐ。ゐ。ゐあゝく台命ゐ依ゐゐゐ。経任
時夏ゐ首級の外ゐ。鬼六（武詮昌之ゐ。）五十五六（高吉高利。）吠又（高利。）鵯夜叉（德大將光仲。）

射を驚す。鵄夜又偏忠ホが斬首五級既ホ実検をえぬ只恨くハまご鐵猶天
藤五と象子彈平太が首を獲ざ又この園坐ホ第一番の席を空くうとと。
亦是ひろの憾と云ぶ義邦外面ヲ出く現朝夷ハ経任を殺うぶら
この処へ立よぶ云ふ。某いひく誘ひ来て三三もあれねとひうけく
立んとする式光仲ハ遽く推禁め冠者さのうホ労ひそ縦彼人ハ錯て
光仲を憎むも冠者ホ辞せど又さうホ何国へくう赴くべ顧ホ逃る
賊徒式追ふく柵外ホ出めけぶ今招ぎども遠うどくこホ集合ん
只公ハ云ふ式ハ篤姫のくあるか。その恙ふ式ハ標吉郎ホ問ひかど村落ふ
尼をあるぬ藁二郎のく隷ふぶ非常の患ひを御ぐホ足ふド鎮守府の城ホ
送うくふ式ハ労を進ふ式ハ迎とふ義邦この茂ホ従ひく廣
光と嗣忠ホ云と分ふ式光仲も亦士卒ホ命ひく轎子を求出さ雑兵数
廣光ホ追ひく遣けり。程ホ火を滅留ふる一隊の士卒ハ経任が婢妾
二十餘名を掠取て本陣ホ牽ゆく云云と報ず式光仲端ひう出く
ふる式ハ後堂ふく焼死ふる婢児们ハふる中ホ二人ハ曲演ふる。
水を被ぶく爛を脱ぎて式ハふるその本質素性を嚴ふ質問ホ云ふ式ハ良家
の女児ゆく経任ホ要合奪らぬ已ふ式ハ逃ぶ式ハ
豫ふく公を恐ふく式ども竟ホ便を得ぶ式ハ
悉ふ式。汚穢を忍ぶ経任ふ使ふを身の栄ホ世ゆ共ホ忘ふ式ハ光仲既ふ
ふる式質ふくいつもも嘆息ひ嗚呼賊中ホも清濁ふる欲天ハ善ホ福ひ必
淫ホ禍ふ式ハ応報ふくの如ひ。おそるべく懼るべ式ハ警め人を警め
躯ふく件の婢妾ホを高吉ホ預けく後ホ親里へ送ふ遣けり。かくく
又光仲ハ生虜の賊徒を責く鐵猶矢藤五ガ事式問ふホ渠ふ云ふく。

経任が石室に忍ばせる。幻術の秘書を竊取り。剰経任を欺くこと隊兵五七人と共に厨川の柵に到れ。二千金を掠奪して逐電せるに紛なし。

さて又矢藤五が相貌を問究め。士卒の中に画を好むものあり。画こそあるべき人澤山。矢藤五重連が骨相圖を幾枚こそ写

さん。當國都國北國にても俄頃に羽檄を飛ばす。その國々の守護頭人に賊將鐵箭矢藤五を搦捕を指進ぜべと。徇させけり。光仲はかう掟て佐味高利と俱に柵中を巡覽るに経任が偷貯る。金銀珠玉卷衣ばかり毫も遺さず燒失さるべき倉に積る兵粮は一粒も恙なし。光仲は武人なれば佐味高利に向ひ。陣中は糧竭きけんと。賊徒の財宝を燒失さこの兵粮のこと我ら士卒の苦戰を憐みあり天の賜なりとて鎮守府に食を乞ばんとて。急に下河辺高吉を召

して云々と分付まで。高吉船一倉なる米を少し車に乘せ馬に負せ鎮守府に送る程に。近郷の農民に曩に逃去りし賊兵を戎は數投に或は搦捕て牽来るもの百四五十人に及びぬ。光仲は賞して人別に米三斗を取せ。高利竊に諫めいはく。経任既に亡びぬ。厨川の柵は象子彈平太員持まで。曩に躬方の弱りし兵粮の竭たる故。況今百姓們が偶中の功を賞て。可惜夫食を費すは賢慮にあらず。と

いへば光仲微笑して。趣理義に稱へり。なるほど功あるものを賞ぜず。何を以て善を奬まん。且この米穀は。経任が虐暴まで。原是民の米穀なり。彼が物を彼に返さを費さんとのいへば。光仲は武運竭ぬ。兵粮有餘なりとも。厨川の柵を落して。亦復戰の兵粮を獲べし。惜むなかれ。と說示せば。高利言下に心服して。その大量を感ずる。浩如の馬養嗣忠かな

ずくまうしたべたことはふ。光仲敷く陣所ふ入る。義邦と共ふこれ笑くふ。
嗣忠がいう。某ふ篭姫を迎とアとをうんゐる。豫て朝夷生又笑ーまうく。
中尊寺村のようなる。村落ふ寺ゆ多く。尼ゑ庵やあると問ふさるめいなり
いう。いと詩ーくろのう。廣光共侶彼此を隈るく索巡る程ふ引入る樹立の
間ふ。とアるる堂ふまけり。本尊ハ御體三尺あまるる。觀世音立せゐ人。
篭姫ハこゑほとうなる。塞銭櫃ふ身を倚ゑ。熟睡ーくをうーゐ。又藁二
郎とかうんハ。縁頰ふ尻をゑ。ひくく。こをもうく。睡りてをう。廣光也こと呼覚ー藁
二。ゑこや姫こを。葬ふハ置をうぐ。ふ伴ハゐるーたと。問まて藁二
姫こゑも頭を擡げ。四下を廻視く大ることるうち驚死藁二郎先のゆう。
朝夷ぬの指圖ふ任ーく。姫を潛ーをまーハ則この処ゐう。尼も今おでこゑふ
在まーゐ。昨夕ようを。身も心も疲労て。ゐゑとも目睡わ。伴覚さまを熟視ん。
あるう葬ふいとく異えことをゑ不思議とのべえのを。吾倚もとゐるうとのふ
又姫こふ問をまぐ。藁二郎がいるふ違つるぞあゐの尼ハゐ。戀ふ。昨夕と
今朝の炊ゐもうぐうう沢芹摘ゐてをく。管待れハ夢ゐる欲ゐのうゑと
宜ハうとうく雑兵を遣ーく。近え里人ふを召よう。件の堂の縁起を問ーふ
里人ふ答て云原この觀世音井ハ圓通寺の本尊と同木同作の霊佛ゐり。
秀衡ぬ。世ふ。ゐまをかりーえ。判官殿義経をゐ。武運長久の祈願所ふ迺當寺を
建立ーこの佛像を安措ーく。新圓通寺と號けう。秀衡卿ゐまうをく後
判官殿もく程ゐ。滅亡ゐりーぐ。この寺遂ふ頽破ーく。その堂をのこ遺
せーという。かうぐ葬の尼とうんえーハ觀世音の化現ゐうん姫こハこの年来
觀世音を信ーゐ。且彼寺ハ判官殿のゐんゐるふ建ゐまうゐのゐまぐそのゐ
今弱ふをうーゐ姫こハ因縁ゐ。利益ゐーとべうぐまぐ又彼霊佛ハ

新圓通堂
春

圓通廢寺
み両使
琵姫み謁を

初ゆ朝夷生まるく経任を撃せんとく。その柵中の繪圖を取らく妙智力を添ゆ。彼霊佛の両足ゆ田の泥乾張著くあゆ又その袖ゆ芥の葉迷まり。かる奇特ゆ姫うゑ感涙を堰あへぬ。

こはこもあまこ良人の今天つ日を見めてもその御佛の利益ゆけん人こよ霎時等。普門品一巻をとてゆ讀誦ーたまうるもの大悲の影仰んあゆ尊ゆと身を投傍うくべ藁二郎も讃歎隨喜の思ゆを起ー。雑兵ゆ至るまくゆ深信贍ゆ銘ーるも姫うゑ讀経ゆ程あまゆ某先走り武佐りくゆ言を報ゆと言爽ゆ述ーうべ義邦耳を側ゆ。

うち驚くまで深信の応報空ーうるゆ。今更ゆ感悟ーつ光仲も又信く破ゆぬ。次の日件の里人ゆを召ようく。圓通廃寺の観音へ米銭鞍こを成寄布を吉見殿夫婦の為ゆ永く香華をまゆるせよと叮嚀ゆ下知ーうされば

又この曉ゆ柵外なる陣営を守りくる二百餘名の痩士卒ハ鬼六が一隊ゆ賊軍ゆ追走ーくさまでく泉川の上ゆ夜を明ーかの時平泉の柵ゆ入りく。件の霊験を伝聞ゆ心清くくあるもの舊病頓ゆ本復せりこれも亦観音薩埵の利生なるんと人みかいハけ程ゆ江二廣光ハ藁二郎と共ゆ篭姫の轎子を守りく。相模ゆくかり来ぬまゆ光仲ハ嗣忠武詮ゆ門内ゆ出迎ー。躯くその轎子を帳中ゆ扛入させく義邦共侶對面ゆ夫婦再會の情義いまゆ告ゆ濃ゆ疇昔離居の悲歎既ゆ去く涙坐ゆ落ゆ。分鏡いまゆ合ざりーと兄憂苦を一朝ゆ説盡ゆべくまゆ亦鳥鳳並翔ゆの日歓喜ゆ千載の鬱を延る心地ゆ。

ゆの條狀態ヨヌカリ。細ゆ写さゆるくあらんゆ者官冝想像るゆ。かくその次の日ゆ間中隼人守直ハ廣綱の使者ゆく鎮守府ゆ来著ー経任誅

伏の慶賀を述べ、光仲義邦に対面して、籠城の無異を祝し、その軍物語りて、陣中の苦を慰めけり。光仲いとの便宜なるを、置姫を鎮守の府城へ送り遣はべくいろふ。置姫は今雲時朝夷ぬを待ちて、救ひとれ、救ひを面前に速もせめ、辞せどいまんは恩を受く。恩を知らぬは似くなん、と、廣光しきりに光仲これを義なりと誓て、敢又促さず、守直ゆは義秀の武略大勇、義邦の復讐、藁二郎が忠義まで、諸将士の軍功を賞して、前司殿、費綱に、苦まるらせよと仰せ知らしく、鎮守府へ返しけるが、義秀のこ再び出を来ざるとしば、光仲遂に疑念起りて、義邦と相譚ず。廣光嗣忠、藁二郎を召近つけて、朝夷生は豫こより、冠者を救んと欲せ、武略の外に、安つるみ、やと問ふ。食とまりと答へけるそ、中に嗣忠は且く頭を傾けて、某前夜朝夷ぬに、越の稲向許消息を云云と告しるのあまされゆより、彼人を越路遥に、必ず去り、この外に彼人の投くゆくべくとて思は當らぎゆと、光仲頭をうち掉否、朝夷は義勇の人なり、縦この春越路なる婦は病の床にあり、と、偽り笑ともいふ、人に別を告ぎ、そぶまく、去るのめるらんや、もは必光仲を僻憎ゑ、悪むのあまり、近邸なる農家なども、旅宿に、某に、初武ふはせんとくなん、三二年来彼人のこころを、ひのりぬ、藁二郎を、ねるくその旅宿を索ねるぬ、くと、諭しくとに、誘ひ、義邦この議を善とく、某夫婦は朝夷生に大恩を受るのこは人を、とぶべくも、某こぶくべ、とのふに、光仲、欲びく、冠者みづから、起れ、彼人推辞ふ、うまくん、さとく、俄頃に下河邊高吉を召しく、云云と

あるを追ひ〳〵雑兵駆部〳〵人々ハ後をとゞめ義邦ハ廣光と雑兵を駆ゐて後門より出る程ハ高吉ハ藁二郎を案内ゝ〳〵られも雑兵駆ゐて一の城門ゝ出る程ハ高利と武詮昌之嗣忠ホを聚會ていゑ。

光仲ハ佐味高利と武詮昌之嗣忠ホを聚會ていゑ。又光仲ハ佐味高利と武詮昌之嗣忠ホを聚會ていゑ。

磐手郡厨川ゐる柵ハ経任ぶ偽将象子彈平太員持ゐ。思慮ゐホ足ゐ。

ゐ。ゐるねど本柵を逃亡ゐる賊徒彼処ゐ集らぶ一朝ホ攻破ゐかゝゐれ豫さくゐとこのゐ戦ゐゐるゐゐるねども左ホ右ゐ事多くてゐゐ二人日を過しゐ。

朝夷けゐもいで来ぶハ翌ゐぶハ俟ぐゐ。この曛昏ゐゐ人馬を進ゐ通宵路次を急ぐべ〳〵佳例ホ任〳〵く先陣ハ武詮昌之と定めゐ。まゐ陣徇をゐゐけるゐゐ程ホ日ハ西山ホ傾く比下河邊高吉ハ藁二郎と共ゐかの来ホゐ。光仲ゐ見戦俟つけゐゐ。ゐ消息をいゐゐと問ホ高吉ホハ義秀が頃日旅宿ホせとの百姓の家ハゐゐ近ゐ村ゐゐ。ゐ巡ゐゐ探しゐゐ。ゐ往方ぶゐゐゐ

ゐ。ゐゐホ厨川へ進發ゐゐ。俄頃ホ陣徇〳〵ゐと告ゐゐホゐゐ。

歩をいゐぶゐかゐゐ来ゐとのホ光仲仲ゐゐ。ゐ戦失ひゐゐんゐホ小三郎ハ標吉郎と共ホとの柵ゐ留ゐゐ。生虜の賊徒を禁錮〳〵。豈ハつゐめゐ冠者夫婦を鎮守府へ送ゐゐ。倘ゐぶ出陣せ〳〵後ホ朝夷生ゐ来ぶ等閑ゐゐぬ光仲ゐ心操を告ゐゐ。叮嚀ホ命ゐ。士卒六七十名を高吉嗣忠ホ隷ゐ留措ゐ高利武詮昌之ホとその他の軍兵駆ゐゐ。ぶ出ゐる折ゐ朝夷三郎義秀ハ腥ゐゐ斬首一級鐵撮棒の頭ホ著ゐゐを突立ゐ。義邦黄光共倡ホ欣然と〳〵かゐ来ゐ士卒云云と告〳〵ゐ。光仲急ホ人馬を退けゐ慌忙ゐ出迎へ引ゐ賓席ホ請ゐゐ。義秀ゐゐ云ゐ讓ゐゐ。ゐゐホ著ぬ義邦ハその左ホ在ゐ。廣光ハその後方ホ侍ゐ。高利ハ義邦と向ひゐゐ。嗣忠武詮昌之高吉ホハその後方ホ侍ゐ。

姓名を告ぐ。義秀を敬ふと甚し。當下光仲がいふやう。朝夷ぬ。別後の會話まことに説盡さんぬ。曩ゆ冠者夫婦を救れ贖妖賊経任を殴ちとり。武畧勇敢古今無雙といひつべし。便是當時第一番の大功なり。

きろまども賢兄ハ光仲ホをふり捨くいろ地ゆえ。今ゆくも往方を知らぎこの故ホきのやうり。渇望の忍ひ已とえ冠者を労ちとゆいあり。既ゆく鳳眉を接へ又明教を受んと欲ち欲び足ぎくひと恭しく述るふ。義秀仲のくうち含笑を某もいぬる所より。杖を當國ホ曳くあらう聊そのうあまび絶て和殿を訪ざるまえ。そハいつぐあるあらう。和殿ハ約ホ背え。命を惜ち途の難義ホ友を捨く勢利ホ附く欲とろくぐ。かくて今如此ここの如まく吉見主役ハ迎られ。その誠心を告られれば疑心立地ホ氷解せり。現ホあぐえるかり。和殿の友を棄るの不義あぐさる人と知らぎ。初ホ突ぎるを結びるるまでも亦愚人なり。その疑ひを釋ま至くまでも亦愚人なり。幸ゆく世の識者ホ背指をさるまぬ。そ第一番の歡びられ又義え。ともあり。今彼れまく立ぐる。吉見主役ホ笑まー。和殿ハ烏鵲川の上ゆくまぐ養母ホ危窮を救ま云云のうあまー。と秋年来環會まく欲ーく四國鎮西の盡れまでも編歴ーる義秀ハ母の面影ゆんぐるもまく和殿ハ識まるのあらぬホまぐ母ホ對面せまー。是第一義の好話ゆく美え限りえられ。

どもまぐ母ハその後往方去まどとのべ。靴を隔く癬を搔くとゆふ古語ホ似るのち母のまハ閑ゆーそ。ゆのめ某さのの曉ホ経任を殴ーと。直ま走ま去りーまハ和殿まあぐどそゆハあらぐ厨川の柵ゆハ賊將吹又ぐ弟とゆーえ。象子弾平太員持とのホ盗賊奴ぐ黠の賊徒を招く籠れり。寄ゆハ員戰死ぬかり。追捕等閑ゆく時日を過さぐ。平泉ゆく討漏され。

賊卒彼処へ集合あるべし。倘あるべし員持ハ経任滅亡せしと伝へ
逃失ざるあるハ骨折序ハ彼奴を殺し吉見殿の鎌倉へ帰参ろ
累ハ取らせんと心ろかろひて莽の尾ゞ贈りし所平泉の地圖ハよろし
厨川へ往返る不思議の捷徑あると式豫てより知りしまゞ繪圖ハ隨ひ直走して
昨夕厨川の柵ハ勢ひ偽て平泉より火急の使ととく呼門ハ城門守り
の賊卒ハ俄に内ハ入まゞ平泉のあん使あるべ契あらん又せよといふ
これこのるハ詐まゝ乱あく答て云汝達いまゞ知ざ所欲使ハ
契を賜るハ平日無異の時ハあるのるハ平泉の柵ハ今暁寄ハ攻破
らまく修羅公戦殺ろのゝ某ハ吠又ぬの密意を受しめの本のまゞ象
子殿ハ拝謁しまゝ出まゝあしゝ式告まゝさんとく捷徑より走来れりとく
入まゝとのそゞ賊卒使ゝく驚騒ゞ躯ゝく弾平太ハ云云と報知しけん

程あまく角門より某を呼入れつ引く客房のほとりハ到りぬ當下象子
弾平太ハ腹心の賊僕ハ燈燭を秉んく端近く出く紫内せし賊卒を
退しく躯く某を縁頰へ呂登るまゞ搦くる鐵樫棒を使りよく倚ケ
措くそゞ侵ハ上りしゝ弾平太つくく又く縦火急の使ろ式契あるく
豫てろ面を識まるめをそ擇く遣まゞれるまゞハ乱めを
りく密使ハ立らましハまろゆゝ出束まゞ式めを
とまし歃の姓名を使ろ欲戦ひの為体よく知まつゝん。いゝ笑んと問せ
果ゞ衝と寄せく兇賊いまゞ名を知ゞまゞや。これそ吉見冠者の弟
平泉の柵を火攻しく修羅五郎経任式只一刀ハ誅しる。朝夷三郎義秀
また又汝ハ式誅戮して盗賊の根を断んとく夜をとめく来つゝ幾百
人でも敵を嫌つゞ砍殺さん欲拳殺さん欲踏殺さん欲

或は捻て殺さん狡猾を仕しく瞬間に死人ぞ山を築く遊び覚期をせよ。
と罵るに彈平太は勢を取るまく齊一眼弦睨て或は呆れ或は怒り
原来癖者逃るまと敦圍なぐり立んとせ〜彈平太が足を拂て山崖
の似筋斗打しく起んとする紙起しも立ぞ縁頼に倚りつゝ鐵棒を搔取て
項を礮と打しく頭骨を撲砕く首は空さまよ飛揚り軀は俯しに倒れつ。
衆皆これに駭怕まく逃んとするを追蒐追詰當坐に七人打殺しつ庭よ
内りと下り立く天地に響けと声をあるく立平泉よりは妖賊経任又さの柵
に彈平太ホを天意に任しく義秀がかくの如く誅しつ圍魔の聽を
開るぐに衆皆ものと呼るに柵中の賊徒四五百人ヨヌ勢を憑む剣戟三昧
一個の敵と侮るに人數を盡しく群こと彼此つゝ聚まつ推取れ龍て發んと
競ひをるの隨に引ひく一棒毎に五人三人撃殺さるとのあるまに。

衆賊もそれまでく崩るまつ慌忙に逃るまく前に立つる二三十人庭なる
池に滚落く溺つ沈まつ溺るを後なるめにまつ疾逃んとく推
程に推落さるまく水に溺るに推落しく已も亦滚び入つ沈むのみにくるくと
に数をまつまで残るに僅に五六十人大地に平伏しく掌合しく助けるに鬼
百合の露を添る血の涙さもそあるまと藤棚なる蔓を鞭引動く。
珠数繋ぎに縛しめく皆樹下に繋留めるに隠るまとそのやあるまと石
燈籠なる燈蓋を掻起しくことをりく漏を曲なく求獵しに残る奴原は
落亡さるん外に人氣あるをるんぞこゝろてその曉くに近郷に走り出て
里人ホを呼起しくこゝと説示るに皆驚びく一殘に及ぶに彼に若とるに
知らく義秀が後に従に二三十人ずにけるに生拘る奴原に里人を
附措て且く柵を守らく藏人は軍監共侶厨川に勅ぜく支の

義秀
衆賊
壓不支
賀朝夷義秀
剿盜謌
玄同居士

光景を按てゐるべし。よるべく彈平太が首級をのこ如此の事の證ゐでゐ。鐵撮棒ゐ結びさげたり。彼又ゐ人と指し示せば義邦高利いべさとえこの席ゐありと存るゐ。あのく膝の進むを覚ぢ。その勇敢ゐ感服しく興ゐるゐ。そゐ中ゐ光仲ゐ件の物語ゐ殊更ゐ驚嘆し人の智恵と武勇とゐかくまぐ差別あるゐの狩某此度追討使としく従ふ軍兵ゐ九ゐ鎮守府の守兵と共ゐ二千餘騎ゐ及びしゐ寡兵時も七八百騎。五六百騎ゐあるゐ。さゐ勝負區々ゐく遂ゐ賊徒ゐ苦しめらゐ自殺せゐやとゐしるゐ。朝夷ぬしゐ単身ゐ初ゐ従ひるゐ藁二郎と三二標吉この三人ゐ過るとゐ。かゐとゐ輙く賊柵ゐ竊ゐ吉見殿を救ひ出し。更ゐ火攻しく。衆賊を屠り刺経任を殺ゐ多ひし。その武勇ぐも人力ゐしぬゐ。進て厨川ゐ。賊将彈平太と誅戮し其九ゐ衆賊を殺剿せしかの知勇勇将猛者ゐ和漢今昔ゐ類ゐ。神武英略一人のゐ。光仲ゐ如ゐ火をゐく賊を攻撃しゐ三ゐ。就中兵粮車の拙策ゐ已ゐを沼ざるゐ生ゐ。さゐゐゐゐゐ謀ゐ行ゐ。奥ゐ放し火を貸ゐく車の火薬ゐ移しゐ。一の城門ゐる賊兵を焼走せしゐ。奇ゐ妙ゐ。今ゐ出陣を急ぐゐ要ゐ。夜と共ゐ話り明さん平坐ゐと啓待しゐ。彈平太が首級を受ゐ藁二郎をも圓坐ゐ待ゐ。仏陀の霊験四士の復讐言みゐ義秀ゐ苦ゐる程ゐ實主短夜の暁ゐ就ゐ。その詰豆光仲高利ゐ厨川の柵ゐ赴ゐ及びゐ。此條の物語ヨヌかり。そゐ編を嗣ゐ明年發兄の日を俟べし。

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之五終

編述　曲亭馬琴稿本

庚辰夏肆月脫稿　淨書出像隨成

出像　一柳齋豐廣画

淨書　江戸　千形仲道

剞劂　京師　三四五　井上治兵衛
大坂　一二　山崎庄九郎

刊字校訂　平安　櫟亭琴魚

文政四年辛巳春正月吉日發行

刊行　江戸馬喰町三丁目　若林清兵衛

書肆　筋違御門外神田平永町　山崎平八
大坂心齋橋筋唐物　河内屋太助

拙舗累年書籍ヲ鬻キ近來都鄙一般書房ト弘通ス且ツ諸府縣廳或ハ諸先生ノ御藏版アル毎ニ幾兒ヲ命セラル故ニ新板圖書ハ積テ以テ洩スコトナシ加フルニ和漢洋ノ書冊ハ今古ヲ不論亦以テ備ヘ置ケリ仰冀ハ書ヲ購フノ君子其多寡ニ嫌ナク幣店ニ就テ御買得アランコヲ

文榮閣主人謹白

製本處

前川源七郎

大坂府下心齋橋筋北久寶寺町卅九番地

早稲田大学図書館
011888007352